

だが、震災現場の神戸・長田区の真野地域は、自衛隊依存ではない地域防災自治能力こそが大震災にあたって最も肝心であることを示した。真野は過去30年以上におよぶ住民協同の街づくりの経験をもつ小学校区である。ここで詳しく紹介できないのは残念だが、震災直後、最も敏速に、最も住民本位にたちあがり、被害を最少限にいとどめ、住民やボランティアの力を整然と集めて、復

興への道を歩みはじめたのは真野地域の自治組織であり、街づくりに住民協同の力を蓄積してきた真野アソシエーションであった（現地レポートとして西堀喜久夫氏の『住民と自治』95年4・5月号、『大阪の住民と自治』94年4月号を参照）。

私は、「神戸を忘れるな」の協同の精神につなげて、復興の論理は「真野に学べ」から始まると思っている。

特集 町づくり復興を協同の視点から

日本労協連の「建設労働者協同組合」設立

誇りをもった建設労働を行い、震災復興とまちづくりを

鍛谷 宗孝（日本労働者協同組合連合会・事務局次長）

4月22日、建設労働者協同組合は神戸の地で産声をあげた。労働者協同組合の新たな挑戦の始まりの日である。

大震災の惨状を前に、神戸でわれわれができる「よい仕事」とは、「仕事と住まい」を求める住民の願いに誠実に応えることであり、「いのち」を起点に協同の力で「まち：地域」を再生すること。神戸での決断は早かった。連合会、センター事業団も直ちに呼応した。全国の事業団の反応も素早かった。緊急時の支援の後、島根、山口をはじめ、大工、土木の仕事ができる団員が現地入りした。全国的な取り組みによってのみ成功しようというのは、決断したものの直感であり、真理でもあった。

すでに、2月の終わりから家屋の解体撤去、改修の仕事が始まっている。建設労働者協同組合設立の呼びかけに応え、賛同者も日毎に増している。住民の要望は日増しに集まってくる。その要望に応え切れぬもどかしさがあるやうになって、つい口をつく。しかし、「よい仕事」をしている団員の成長が日々伝わってくる。今まで埋もれていた団員の「能力」が発揮されたという報告を聞く。京都府立大学の学長の広原盛明教授が「3年、5年、10年という長期の展望をもって立ち向かえ」と教えてくれたことばが安心感とさらに鋭い使命

感を感じさせる。「ここに地終わり、海始まる」建設労働者協同組合は、今、歩みを開始した。

「家」は生活の拠点

神戸協同病院の上田院長は、日誌に被災後の活動の内容をまとめている。その中で、被災後、肺炎などで亡くなった人がかなりの数にのぼると報告されている。「家」を失ったことによる生活の激変、基盤の喪失による精神的ダメージの大きさが疾病の引き金になっているという。

神戸の事業団の理事をされている村田さんは、家を地震で失ったが、「個の喪失」と表現された。地震後、親類の家に身を寄せ、4月の下旬に仮設住宅に入られた。事業団の手で解体された家屋を一刻も早く再建したいと願っている。建設労働者協同組合の発展を心から期待している一人だ。

住んでいたところからは離れたくない、「ここがわたしのふるさと、必ず帰ってきます」「この店は、必ず再建します、その時にはまたよろしくお願ひします」といった張り紙が、崩れた家々の「入り口」に張ってある。住居と離れたところに建設された仮設住宅は、いっぱいになることがない。避難所では、被災後2ヶ月をたった時点でも5万人弱の人が生活している。高齢者をはじめとした「生活弱者」が多い。新たな生活基盤が出来



始めている。

解体・撤去作業への着手

団員のほとんどが被災し、仕事もすつとんでしまった。安否を確認し、生活の立て直しをまず第一に、給食センターでの炊き出しを始めた。市からの要請に応え、灘区の避難所のゴミの収集作業、緊急救援物資の受入作業など全国の事業団からの支援部隊の力を投入し始めた。

緊急作業の向こうに何がある。誰かが何かを準備して手招きをしてくれるはずもない。「仕事おこし」というのは、労働者協同組合の専売特許ではないか。不安の渦巻く中、建設労働者協同組合への決意が固まり、解体・撤去の仕事が始まる。

2月27日、場所は、村田さんの家。ユンボを島根の事業団に手配してもらい、4トンドンプをレンタルし、ユンボの講習にいった団員と以前から経験のあった団員がいっしょになって「格闘」が開始された。

神戸の西脇専務の話によれば、震災以前にも解体の仕事は持ち込まれたことがあり、そのときには、「こんな危ない仕事やめとこ」ということでやらなかった経緯があったそうだ。

「よい仕事」が仕事の意義を深め

人を成長させる

4月22日午前中、設立総会の始まる前に、センターの東京のメンバーと一緒に解体作業の現場を見学に行った。ユンボを動かす団員の前川君の鮮やかな「ユンボさばき」に驚いた。それ以上に、

彼のはにかんだような笑顔がうれしかった。案内をしてくれた団員の山本君が、「2ヶ月前の顔と全然ちやいますよ」といっていたが、そのとおりだ。勿論、まだ不安はいっぱいには違いないが。

解体作業の現場には、建物の所有者が必ずやってくる。そこは、その人の場所。生活のかおりが満ちている。思い出が埋まっている。作業の途中で思い出に行きあたる。解体の作業の手は、思い出を掘り出す手になる。

「解体は切ない仕事や」、しかし、そこからしか事は始まらない、どれだけ住民の思い出=生きる糧を大事に仕事ができるかで、生活の再建の元気の速度が違ってくる。作業の熟練度は、平時の数倍の速さで身につく。人としての成長は、それに並行しているかのようだ。

緑化の現場で働いていた野島さんは、重機の経験があり、解体の仕事もこれまでにしてきたことがあった。今回、それが分かった。解体作業の先頭にたった。はじめての団員にはこれほど心強い味方はいない。人の出会いの幸運にもめぐまれている。パンの藤田さんとの出会いを思い出す。労働者協同組合と手に覚えのある高齢者の出会いと言うのは、高齢者自身の生活と労働者協同組合に無限の可能性を生んでいくのではなからうか。

「すまいづくり、まちづくり」の

壮大な学習過程

京都の「もえぎ」設計の久永さんに協力の要請のためにお会いした。新建築家集団で活躍されている。設計の技術者としては、「家屋の修理、改修」を非常に重視している、というのは、地震による倒壊家屋は、恰好の教材だからだ。どういふ新しい家をつくったらよいか、ということを中心に考えていたわれわれにとっては、新しい視点があたえられたという思いである。

また、全京都建設協同組合の永井さんは、設立総会の際に、「家が人を殺したこんなショックなことは家をつくる職人にとってはない」という発言をされた。全京都建設協同組合では、のべ600人の組合員が、被災地へ家屋の診断、調査に入っ

た。そして、在来工法に自身をもって帰ってきた。これは、日本の住宅建設にとっては大変大きな宝物だという気がする。

神戸市長田区の真野をはじめとした「まちづくり協議会」、そこに結集している建築家を始めた技術者集団、そして市の行政に携わっている職員、そして、市民の一人一人が、「文明」の根本問題に触れながら、「すまいづくり、まちづくり」の集中的な学習体験をしている。

建設労働者協同組合は、その中で「よい仕事」の実行部隊として仕事ができるよろこびを噛み締めている。

総合的な政策の提起

設立総会では、建設労働者協同組合としての基本政策を提起した。それは、家屋の緊急の解体・撤去と仕事おこし、そして環境を守ることを三位一体として、総合的に考え、生命・労働・地域の再生へと「よい仕事」を通じて進んでいくことである。

家屋の解体・撤去が進まない限り、新しいまちづくりはできない。解体・撤去がすなわちまちづくり、ないしその第一歩といえる。その「まちづくり」に地元住民が参加することはとても大事なこと。参加しやすくするためにはどうしたらよいだろうか。農業と林業の土地改良や林道の設置・造林の際の助成金の制度の演繹はできないか。

また、復興事業が必ずしも仕事おこしに結び付かず、逆に、粉塵、道路の渋滞などを巻き起こしているようにとられている面もある。この、仕事おこしと環境を守る復興事業の在り方がドッキングできないか。

コンクリート等の瓦礫は単に海に埋め立てればよいというものではない。ましてや、廃材は選別して、少しでも埋め立ての量を減らさなくてはならない。すると、解体撤去という復興事業の第一段階に環境と言う視点で、人手を大胆にかけるべきである。

つまり、復興事業というすぐれて公的な事業に人類史的な環境という視点をしっかりと据えて、



地元住民の復興事業への参加と仕事おこしを公的な事業として、助成の制度をつくり事業推進のシステムをつくるのが大事なことである。

その中で、建設労働者協同組合は非営利・協同の重要な一員として十二分の力が発揮できる。

高齢者協同組合づくりと結んで

西宮、伊丹、神戸の震災後のホームヘルパーの活躍は改めてその仕事の「尊さ」を教えてくれた。大江健三郎の「上品な日本人」そのものである。

まちづくりの再建案に高齢者がこれまでくらししてきた地域に住めるための「グループホーム」などの提案がではじめている。

神戸の事業団の給食センターは、真野小学校で避難所生活をしている被災者に1日250食の弁当を、市からの要請で5月1日より届け始めた。真野では、再建のために「まちづくり生協」という構想も検討を始めたと聞く。

あちこちで「生活の質」「生活様式」を問い直す「萌芽」が出てきた。非営利組織の神戸での活躍、若者の率直な行動は21世紀への明るい展望である。多くの非営利・協同の力の結集こそが、人の潜在的なエネルギーを引き出し、未来をつくる最大の力となるだろう。建設労働者協同組合は建設の分野から協同の力の結集に接近し、高齢者協同組合は生活全般の協同のはじめてのとりくみの挑戦者として、非営利・協同の大結集・大連合の一つの軸を形成していくであろう。